

秋日偶成（程顥）
しゅうじつぐうせい ていこう

閑来 事として 従容 たらざるは 無し
かんらい こと しようよう なし

睡 覚むれば 東窓 日 己に 紅なり
ねむり さむ とうそう ひ すで くれなひ

万物 静観 すれば 皆 自得
ばんぶつ せいかん すれば みな じとく

四時の 佳興 人と 同じ
しいじ かきよう ひと おなじ

道は 通ず 天地 有形の 外
みち つう てんち ゆうけい ほか

思は 入る 風雲 変態の 中
おも いる ふううん へんたい うち

富貴にして 淫せず 貧賤にして 樂しむ
ふうき いん へんせん たの

男児 此に 到らば 是れ 豪雄
だんじ こと いた こと げうゆう

閑来無事不従容 睡覚東窓日己紅
萬物静観皆自得 四時佳興與人同
道通天地有形外 思入風雲變態中
富貴不淫貧賤樂 男兒到此是豪雄

解説 秋のある日、たまたま感じたことを述べたもの。

語釈 ※閑来||ひまになつて※従容||ゆつたりと落ち着いていること。

※自得||自分からその地位や境遇に満足すること。※有形外||形のないもの、

※風雲変態||世の中すべて変化の多いこと。※富貴不淫||淫は心をとろかし惑わすこと、富貴をもつて誘惑すれば堅い心がとろけることをいう。

通釈 一地方官となり暇になつてからは、何事に於いてもゆつたりと落ち着いた。早朝に出仕することもないので、東の窓に紅の太陽が差し込むころに目をさます。万物の色々な姿を静かに観察すると、それぞれが自分のおかれた境遇に満足している。春夏秋冬のよい趣きは自分も他人と同じく樂しむ。我が信ずる道は天地間の有形の物ばかりでなく、無形の精神上のことにも通じ、我が思ひは世の中の変化の多い全ての事柄の中にはいつて、よくこれに処すことが出来る。修養を積み、富貴であつても心を惑わす事なく、貧賤であつても心の樂しみを失う事のない境地に男児が到達することが出来れば、豪雄の人と称すべきであらう。